

田村俊子作品集

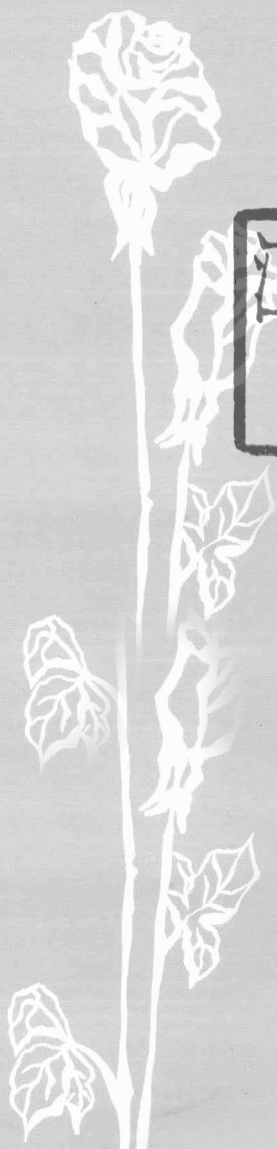
第3卷

田村俊子作品集

監修



江苏工业学院图书馆
藏书印章



田村俊子作品集・3

1988年5月27日 発行

定価 3500円

著 者 田村 俊子

発行者 武内 辰郎

発行所 (株)オリジン出版センター
東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402
電話 (03) 260-0453
振替 東京 0-44705

装 幀 山本 亜矢

印 刷 (株) ケイエムエス

落丁本・乱丁本はお取り替えます

目

次——田村俊子作品集・3

日記・書簡

I 俊子日記

——一九一八（大正七）年

俊子書簡

——一九一八（大正七）年～一九二四（大正十三）年

II 鈴木悦日記

——一九一八（大正七）年

鈴木悦書簡

——一九二一（大正十）年

隨筆 その他

句 ひ

二三日

『ね』話

329

323

313

299

249

179

9

微弱な権力	333
平塚さん	339
日記	341
界を隔てたる人に	352
現劇壇の新女優	358
昔ばなし	366
私の浴槽——夏十題(七)	379
冬の日を見詰めながら	382
お角力から歸つて	385
内田多美野さんへお返事	392
日本婦人運動の流れを観る	398
二日間	407

新しい母性教育とは？	417
------------	-----

解説	瀬戸内寂聴	423
----	-------	-----

解題・年譜	黒澤亜里子	435
-------	-------	-----

田村俊子作品集・3

日記・書簡

I 俊子日記

一九一八（大正七）年

五月三十一日

風が強く吹く。曇つたり晴れたりしてゐる。

午前の中に三河屋へ洋罫と日記を付ける紙を買ひに行く。善光寺前までいさちやんと一所に行く。よくあの人を送つて行つた道ゆゑ、唯いろ／＼な思い出が私をとらへて寂しがらせる。三河屋で半年分付けられるだけの洋罫紙を買ふ。帰途は一人だったから、猶寂しく悲しく恋しく涙が終始せぐんでくる。全身に力がない。やつと帰る。

洋罫紙一枚へ一日づつの日附けをずつと書いて見る。一と月だけでも随分量がある。この一枚をきつと働きの上に充実した記事でいつぱいにするつもりに考へたけれども、何だかこの長い間が非常に煩はしく、何とかしてこれだけを一瞬に縮めてしまいたい度い気がする。

本を読んだだけでも神経が疲れてゐて気が乗らない。それで頼まれてゐた人形を四つ拵へる。

おひるの食事の時（私には朝食）、箸を見たら無暗に悲しくなり泣いてしまふ。みねが涙含んで私を見てゐる。いさちゃんが「誰れかこんな時おもしろい事でも云つて笑はせるといゝんですけれどね」と云ふ。斯う悲しみの迫つた時直ぐに消えてしまふ葉がないものかと思ふ。

頭が一日中痛む。目も痛い。

人形を作り上げたのが夕方の四時過ぎ。その時何うしたのか不意に発作的に悲しくなり、沢山に泣く。泣けば泣くほど恋ひしくなるので猶泣く。

ほんとに自分ながら困る。

一寸でも自分の身体を動かす事がこわい。原へ行つて見やうかと思ふけれども、直ぐに思ひ出が私を刺すやうで、つい、ちつと家の中に身体をかたくする。もう何うしていゝのか分らない。みねがお夕飯は何うしませうと云つたけれども何も食べたくないからいゝと云ふと、それはいけないでせうと云つたので又泣いてしまふ。これはあんまりだらいがないと自分ながら持てあます。けれども何うしたつてこの恋しさの打消しやうがない。きつと我慢が出来ないかもしれない。こんな事では。一年はおろか半年も一と月も。困つた事だと思ふ。いつそ家を代へ、ところを代へたらいいかもしれないと考へる。こゝにはあんまりあんまり思ひ出が多過ぎる。

風がつめたく吹く。風が變つたのだと見える。そろ／＼今日も暮れて行くと思つてあの人は船の中からこの暮色を持つた空を眺めてゐる事だらう。

何も食べたくないから林檎でも食べて見やうと思つて買つて来てもらふ。其れを食べて外を見て

ゐたが非常に気分がわるく、起きてゐるのに堪へられない氣持になる。胸が切なく、息がとまりそうで何うしていいのかわからない。いさちやんが大いそぎで床を敷いてくれる。「身体がわるくなつては大変です」然う云つて一心に私の世話をしてくれる。みねもいさちやんも、どんなに私のこの寂しめと恋ひしがる事とに同情してゐてくれるかわからない。そうしてはぼつ／＼と、船はもう何所までいったらうとかやつぱり考へてゐらつしやるだらうとか、朴訥な云ひ付けのない言葉でこんな事を私の為に云つてくれる。何と云ふ優しい人たちだらうと思ふ。年もいかないのにいさちやんはこの事の為にその廻らない情を尽してゐる。何うして私を慰めたらいいのかと云ふ風で二人ながら途方にくれながら。こんな事あの人が見たり聞いたりしたら、「人を困らせるばかりぢやないか、しつかりおしなさい」と云ふに違ひない。

床の中でうつら／＼眠る。郵便の聲で目が覚める。もうすっかり日が暮れてゐる。雨が降つてゐる。雨が障子にあたつてゐる。私が起きたのでいさちやんがはぎを持って来ながら戸をしめてくれる。はぎはちゑ子さんから。帰つて来てゐるのだが人と話したり何かするのがいやで困つてゐると書いてある。

起きて玉子のおつゆを吸つてゐると按摩が通るから呼んでもらふ。目の見えない子按摩だつたが、上手によく肩をもんでくれる。揉んでもらひながらエマーソンの靈法論を読む。こゝが読んで見たかつたから——いろ／＼な事が感じられ、又力が付けられるやうな氣がする。

按摩が上手だつたせいか、あの人「静に眠るのです。静に。静に。」とでも云つて祈つてくれ

たせいか、私は思いの外な安らかな眠りにずつとその儘落ちて行く事が出来るやうな気がしたので、一旦床を出てから日記を書いてしまった。雨を聞きながら床に入る。みんなはまだ起きてゐる。早く／＼あの人の手紙がほしい、ほしい、ほしい、と思ひながら——ちつと枕に頭をつける。

註 文中の「人形」は、当時俊子が生計の足しに作っていた千代紙人形（第一巻口絵写真参照）のことである。

ある。大正七年三月から、俊子を援助する目的で高村光太郎・智恵子夫妻を發起人とする紙人形の頒布会が発足し、玄文社代理部を通して注文を受けていた。いさちゃんは数年前から俊子がひきとって面倒をみていた米光関月の遺児いさ子、みねは女中、ちゑ子さんは高村智恵子。

六月一日

朝四時目が覚める。もう眠られない。戸をあけて床の上で空を見る。雨が止んで曇つてゐる。非常に胸苦しい。エマーソンの論文集がそこにあつたから取つて読む。そうして仰向いて考へる。今日こそ勉強して何か書かうと自分に力を吹つ込む。

朝飯はいやだから牛乳を今日から取る事にみねに話して、一人で代々木の原へ行く。青葉が雨に濡れて快い。割合に静に散歩が出来る。練兵場では駿馬の稽古をしてゐたり、喇叭の稽古をしたりしてゐる。その兵士たちの足並みや、将官たちの教示や号令の声を聞きながら、私は暫らく立つてゐた。青葉が遠い。空から雨がぼつり／＼と落ちてくる。それ故少しいそいで帰つてくる。帰途西洋人の青年と少年と二人が話ながら来るのに逢ふ。それが妙に目に残る。

帰つて来てから暫らく机に向ふ。詩をひとつと感想を少し書く。みねは講習に行つて留守。いさちやんが三角さんから（常磐松女子校長）花を貰つて帰つてくる。人形二たつ買つてくれたとの事、手紙がついてゐる。私の健康の事を書いてある。花は非常に美しい。大きなそれは大きな美事な薔薇が二輪とあかいカーネーション、デリケートな雛芥子——私は花を見てゐる内に何とも云へず胸が圧されるやうに苦しくなり、今朝から避けてゐた恋慕心が全くとめどなく私の胸をいつぱいにする。私はもう堪らないのでいさちやんの所へ行き暫らく話す。それでもいけないのでいさちやんを連れて又原へ散歩に行く。あとから／＼と過ぎた日のあの人とのいろ／＼な思ひ出が湧く。熱海の事、江尻の事が一番に私の心を動かす。松林の下の水の傍へ下りて行き蛙の音を聞きながら暫らく佇む。又も熱海の松林の事が胸に浮ぶ。もう何うして／＼のか分らない。空を見ても地を見ても慰まない。家へ帰る。家へ入るともう何うしても起きてゐられないので「胸が苦しい」と云ふといさちやんがいそいで床を敷いてくれ、背中をさすつてくれる。みねが「なるたけ思ひ出さないやうになさいまし」と云つてくれる。船の中の事を思ひつゞけ、あの人の事を思ひつゞけ、ほろ／＼と泣きながら横になつてゐたが、この寂しさを何うすればい／＼のか分らないので又起きる。そうして日記をつけて見る。

十一時頃、明日の大掃除の手伝ひに芝から来てくれる。うなぎの話が出る。よろしく云つた事を伝える。

大掃除で思ひ出したのは去年の春の大掃除の日にあの人を全く自分のものにした事——ほんとに

「自分のものにしたい。」斯う云ふ氣持がその前の晩から動いてゐて、とう／＼あの朝私は大掃除の手伝ひに来てくれたあの人のあつい心を見せてしまつた。あの人はその時椅子に腰をかけてゐて、自分が代議士になるつもりで、そんな用意をした事のあつた事を話してゐた。私は新聞を読みながら「然う／＼」と聞いてゐたが――

あの時の私の氣持はたしかに真劍だつた。あの時、あの人の私に胸にすがつた様にして私をぢつと見た顔を私ははつきりと覚えてゐる。目が赤くなつてゐた事を私ははつきりと覚えてゐる。

私はそれから青山まで葡萄酒を買ひに出た。空には星があつた。あの人もきつと見てゐるだらうと思ふ。歩きながら、決然あしたから創作にかゝる事を考へる。今月中に中央公論のを二百五十枚書き、来月読売を書き――なんでもこの六ヶ月の間に仕事をしてそうして年内に米國へ行く、もう何うしてもあの人に逢ひに行く――何うなつてもその先きの事はいゝ。そうしなければもう何うしてもいけない。斯うしてゐられない――きつとやる。何も考へず、何も思はずそれだけの事に集注してしまはうときめる。歸つて来て葡萄酒をのんで寝る。

註 熱海、江尻とあるのは、鈴木悦と前年（大正六年）秋に滞在した時のことらしい。三角さんは、三

角錫子。「芝」云々の記述は、当事芝鳥森に住んでいた母きぬのこと。「うなぎの話」については、俊子書簡一参照。